

VII 水無遺跡出土八稜鏡

山下孝司

1 出土状況

今回の調査で八稜鏡が出土した。出土した地点でいうと、2号住居址ということになる。

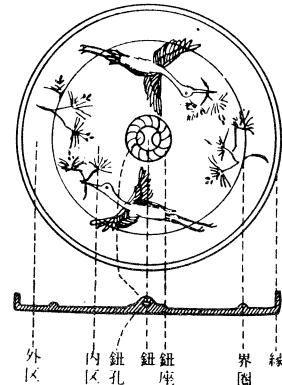
2号住居址は隅円長方形の平面形で、東西約4.5m、南北約3.7mの大きさの竪穴であり、カマドは南壁東寄りに石組で構築される。鏡はこの住居址の北東側から遺構確認作業に際して発見されたものであり、住居址の埋没土からではなく確認面辺りからの出土となっている。確認作業で取り上げてしまったが、鏡面を下にしてあったようである。

2 資料観察（第16・17図参照）

直径8.3cm、厚さ1~6.5mm。青銅製であるが、鋳上がりは悪い。残存状況は比較的良好で、縁部分及び鏡面に剥落が見られる。鈕は饅頭形素鈕。内区に施される文様は、鈕を隔てて唐草と鳥が対に配される。鳥は鳳凰とも考えられるが、鳥腹（らしき箇所）が豊かに見えるのに反して

頭部が不明瞭でそれと断定できない。界圏はへ字圏で、外区とつながる。外区には小乳突起が配される。この小乳突起は、本来3個1組で、八分割された外区に合計24個付けられるものである。縁は蒲鉾式中縁（断面では上半部分が三角形）で厚さ約5.5mmとなっている。鏡面には平行に筋が走っており、木目が付着したものと思われる。

これは鏡面を下にこの鏡が木の箱に入れられていたことを物語るものであろう。



第16図 鏡部位名称
(広瀬都翼『和鏡の研究』より)



第17図 水無遺跡出土八稜鏡 (1/1)

鏡背面の施文の構図は、上下・左右が対称に配置される形で構成されており、いわゆる唐式鏡の唐草双鳥文系の鏡である。八稜鏡は外周を八分割し切り込みをつくり、八つの弧の中央部分を尖らせてているのが特徴的で、本資料は、鳥が定かではないが、唐草双鳥八稜鏡（からくさそうちゅうはちりょうきょう）の呼称が適當と思われる。

3 資料の年代

八稜鏡は、唐鏡（唐時代の中国で作られた鏡。白銅製が多く、方形・円形のほか、八花鏡・八菱鏡などがある。）から、和鏡（平安時代後期から江戸時代にかけて、日本でつくられた鏡で、中国の文様ではなく日本独自の意匠を鏡背面に施文する。）に至る中間的な形式とされ、奈良時代末から平安時代にかけてつくられた。一般的に鏡は、11世紀末から12世紀初頭には、松・藤・菊や鶴・千鳥・雀といった日本人好みの花鳥に文様が和様化してしまい、和鏡は11世紀後半には出現するという。平安時代の文化が大陸文化を吸収ながら漸次日本独自の展開をするなか、奈良時代の唐鏡を模した唐式鏡は和様化に達する前の過渡的な段階の鏡と位置付けられており、八稜鏡も和様化に至る途中の唐式鏡ということになり、10世紀後半には、鈕を中心⁽¹⁾に瑞花と瑞鳥の上下・左右対称構成（瑞花双鳳八稜鏡）が確立する。

鏡の実年代や編年を考えるうえで、紀年銘を有する鏡は年代決定に効力があるが、八稜鏡においては紀年銘をもつ資料は限られる。最古のものとして、広島県宮島町の中村隆燈氏所蔵の瑞花双鳳八稜鏡には永延二年（988）の銘があり、また東京芸術大学蔵の瑞花双鸞八稜鏡には寛弘四年（1007）の銘があり、これらは八稜鏡の年代決定の定点となっている。⁽²⁾本資料には他の大多数の八稜鏡と同様紀年銘がなく類推するしかないが、和鏡の出現が11世紀後半であり、瑞花双鳳という鈕を中心に文様の対称構成が確立するのが10世紀後半とすると、唐草双鳥という文様構成の八稜鏡という点で、およそ10世紀後半以降11世紀前半に位置付けられよう。さらに2号住居址出土ということでみると、伴出遺物には小皿・羽釜・灰釉陶器があり、これらの編年的位置付けをることによって年代推定ができる。

古代末期の土器編年は、坂本美夫氏と森原明廣氏による研究成果がある。坂本氏は10世紀末～12世紀末をI～VII期の8段階に編年し、森原氏は10世紀中葉～12世紀末葉を第1期～第5期の5段階に編年している。これらは「甲斐型土器」消滅後の土器様相を、小皿・脚高高台坏・柱上高台皿・羽釜・灰釉陶器・白磁などの消長を基にまとめており、年代観は主に灰釉陶器の研究成果によっている。2号住居址出土土器を坂本氏と森原氏による編年に照らし合わせてみると、小皿は、坂本編年のIII期にあげられている二之宮遺跡第85号住居址の小皿と同形態で、森原編年では第3期に位置付けられよう。羽釜は、鍔が全周する形態のものと推定されるので、坂本編年のIV期以前、森原編年では第3期以前ということになる。灰釉陶器の碗は、口径15cm、器高6cm、釉はつけがけ、外面体部下半はやや雑なヘラ削り、高台は内面が外傾し付け根が凹む、底部には微妙に糸切り痕がみられる、口縁部は僅かに外反している形態で、丸石2号窯式期であろう。坂本編年ではIII期後半～IV期、森原編年では第3期にあたる。すなわち、2号住

居址出土土器は、坂本編年ではⅢ期～Ⅳ期、森原編年では第3期にあてはまる事になる。なお、森原氏は森原編年第3期を、坂本編年Ⅲ期～Ⅳ期に対応するものとしている。年代的には、坂本編年Ⅲ期は11世紀第2四半世紀、Ⅳ期は11世紀第3四半世紀、森原編年第3期は11世紀前葉から11世紀後葉に設定されており、2号居址出土土器も11世紀半ば前後に位置付けられることになる。

2号居址の土器が11世紀半ば前後に位置付けられれば、八稜鏡も同時期ということになるが、先に鏡の年代をおよそ10世紀後半以降11世紀前半と推測しておいたので、土器と重なる時期をとると11世紀前半後葉ということになろうか。ここでは、本八稜鏡の年代を大きく11世紀前半ととらえておく。

4 県内出土の八稜鏡（第18・19図）

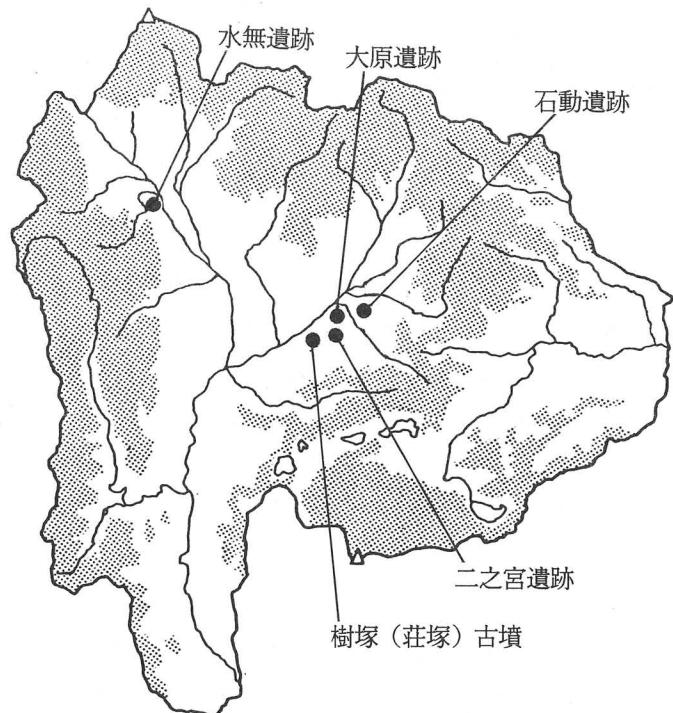
山梨県における八稜鏡の出土例は、管見の範囲では水無遺跡を含め5遺跡8面となっている。以下に、水無遺跡以外の八稜鏡について報告書などを参考にその概要を示す。

〈樹塚（莊塚）古墳⁽⁴⁾〉

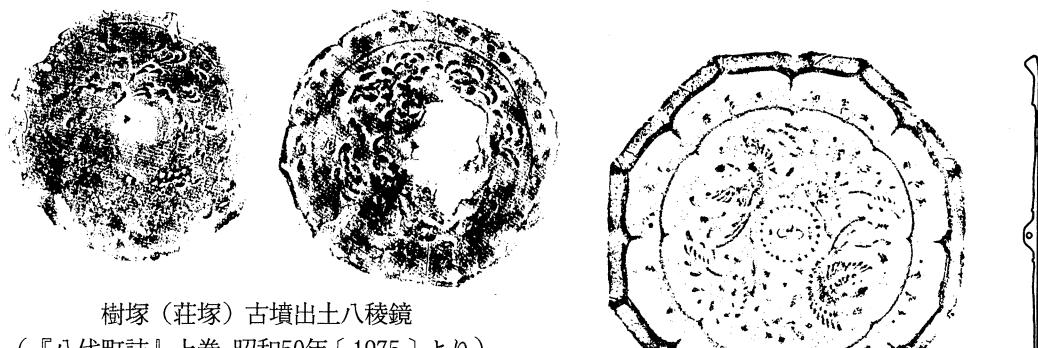
本古墳は山梨県東八代郡八代町永井に所在し浅川右岸扇状地扇端に立地し、周辺は古墳が多く分布する地域となっている。古墳の形態は円墳で横穴式石室とされるが、現況は削平されてしまっていて詳細は不明である。ここからは、昭和26年（1951）に、須恵器・土師器、勾玉、管玉、金・銀環、直刀、甲冑、馬鈴などの遺物が豊富に出土しており、八稜鏡もこれらとともに2面発見されている。『八代町誌』では、古墳の時期は6世紀中葉前後に位置付けており、八稜鏡は10世紀後葉から11世紀初頭にかけている。町誌には拓本の写真が掲載されてはいるものの、法量等の記載はなく詳細が窺えない。残存状態は悪いが、草花八稜鏡あるいは瑞花八稜鏡と思われる。

〈石動（いするぎ）遺跡⁽⁵⁾〉

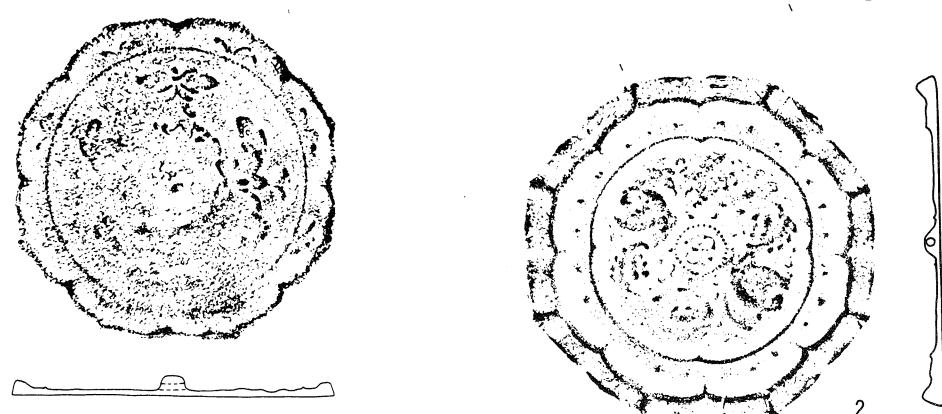
本遺跡は山梨県東八代郡一宮町末木に所在し、金川右岸扇状地上に立地する。周辺には甲斐国分寺・国分尼寺があり、平安時代の集落遺跡が分布している。ここからは瑞花双鳳八稜鏡2面（第19図1・2）、唐草双鳳八稜鏡1面（第19図3）の計3面の



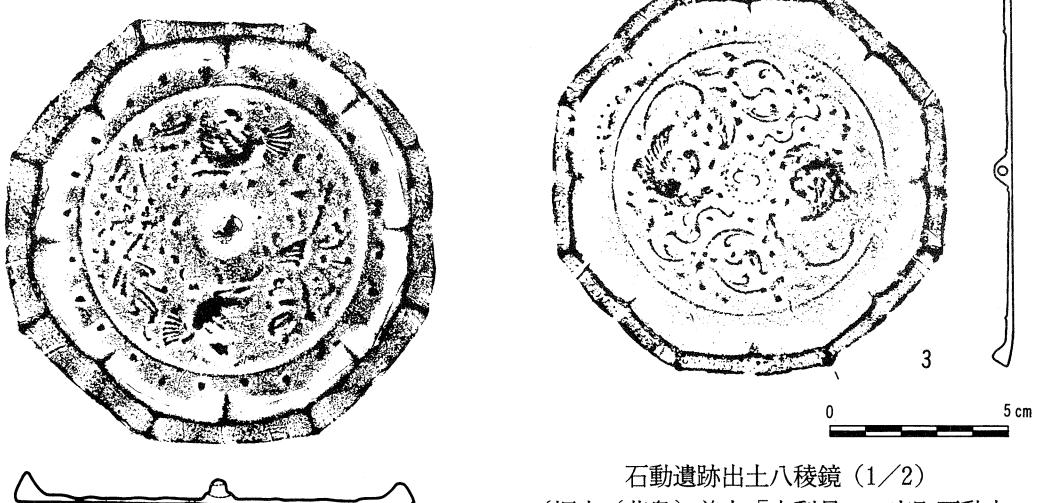
第18図 山梨県八稜鏡出土遺跡位置図



樹塚（莊塚）古墳出土八稜鏡
(『八代町誌』上巻 昭和50年〔1975〕より)



二之宮遺跡出土八稜鏡 (1/2)
(『二之宮遺跡』山梨県教育委員会・日本道路公団 1987より)



大原遺跡出土八稜鏡 (1/2)
(一宮町教育委員会提供)

石動遺跡出土八稜鏡 (1/2)
(坂本（菊島）美夫「山梨県・一宮町不動出土の八稜鏡」『甲斐考古』12の1 1975より)

第19図 県内出土の八稜鏡

八稜鏡が地表下約1mの所から木片とともに出土しており、坂本美夫氏が「山梨県・一宮町不動出土の八稜鏡」と題して『甲斐考古』誌上に報告している。2面の瑞花双鳳八稜鏡は、青銅製、鈕は裁頭円錐鈕で、鈕座には小乳凸起をめぐらし、内区上下に瑞花を置き、左右に鳳凰を配し、へ字圏を経て外区に移行、外区には3個1組の小乳凸起を8組配列し、縁は三角縁を呈するもので、大きさはそれぞれ直径10cm・厚さ1mm~4mmと、直径9.2cm・厚さ1.2mm~6.5mmとなっている。唐草双鳳八稜鏡は、青銅製、鈕は裁頭円錐鈕で、鈕座には小乳凸起20個をめぐらし、内区上下に唐草を置き、左右に鳳凰を配し、段圏を経て外区に移行、外区は小乳凸起と思われるもの4個が配列され、縁は三角縁を呈するもので、直径10.7cm・厚さ1mm~5mmの大きさである。坂本氏は、瑞花双鳳八稜鏡を11世紀前半、唐草双鳳八稜鏡を11世紀後半頃に位置付けている。本例は掘削による偶然の発見であるらしく遺構の特定ができないが、木箱に入れて埋められた可能性もある。

<二之宮遺跡⁽⁶⁾>

本遺跡は山梨県東八代郡御坂町二之宮に所在し、金川左岸扇状地扇央部に立地する。周辺には古墳や古墳・奈良・平安時代の遺跡が濃密に分布している。中央自動車道建設に伴い昭和54年(1979)12月から昭和56年(1981)10月まで発掘調査が行われ、古墳時代の住居址157軒、奈良・平安時代の住居址218軒、その他各時代を含め全体では392軒の住居址が発見されている。八稜鏡は1面出土しており、東西に長い調査区域の東端で住居址の確認段階で鏡面を下にして発見された。どの住居址に伴うものかは判然としていない。鏡は、青銅製、鈕は素鈕で、直径9cm・厚さ約1.5mm~5.5mm程、縁は三角形を呈する。内区には草花のみがあり、外区には芽草を点在させている。草花八稜鏡であろう。発掘担当者の坂本美夫氏は、11世紀前後のものであろうとしている。

<大原遺跡⁽⁷⁾>

本遺跡は山梨県東八代郡一宮町坪井に所在し、金川左岸扇状地扇端に立地する。南側の扇央部には四ツ塚古墳群・姥塚古墳・姥塚遺跡・二之宮遺跡などが、金川を挟んだ東側には甲斐国分寺・国分尼寺などがあり、周辺には古代の遺跡が数多く分布している。一宮町農業地域工業団地造成にかかり、昭和63年(1988)7月から平成元年(1989)7月まで発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代にかけて、358軒の住居址が発見されている。八稜鏡はW65号住居から1面出土している。鏡は、青銅製、鈕は素鈕で、直径11.7cm・厚さ約1mm~8mm、縁は三角形を呈する。内区上下に唐草を置き、左右に鳳凰を配し、外区には3個1組の小乳凸起を8組配列している。唐草双鳳八稜鏡と呼ぶべきものであろう。W65号住居からは、およそ11世紀代の小皿と脚高高台坏が出土しており、本八稜鏡も同時期とみられる。

以上、県内出土の八稜鏡をみてきたが、土中埋設(?)、古墳からの出土、住居址からの出土と、それぞれに異なった性格の遺構から出土していることが理解できる。このことは、八稜鏡が多様な使われ方や扱われ方をしていたことを物語るものであろう。

5 鏡の用法

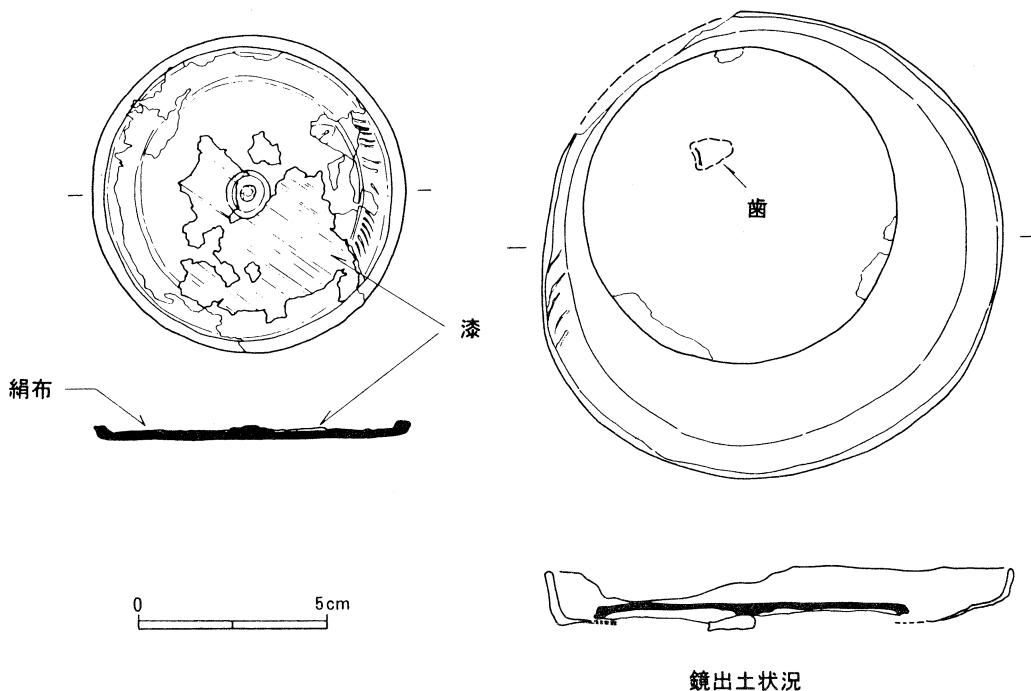
古墳時代の鏡は、化粧道具として使われたものではなく、剣・玉とともに祭祀のための宝器・呪具であり、首長の権威の象徴として用いられ、古墳の副葬品であった。古墳時代の後期になると副葬品に鏡が見られなくなり、飛鳥時代以降奈良時代には唐鏡が輸入され、仏教文化の展開とともに鏡も様々に扱われるようになる。寺院にかかわり、舍利容器とともに塔に納められたり、鎮壇具として地中に埋納されたり、仏像の莊嚴に用いられたりした。また、修法祈祷や山岳修験の咒法に使われた。鏡は、物の真性をうつす神秘的な靈力をもつものとされ、魔除けや辟邪・破邪に威力のあるものと信じられていたのである。また、光を反射する鏡のなかに神仏の姿を重ね信仰の対象とした。平安時代後期になると、鏡は化粧道具として貴族層の間に定着するようになり増加する。さらに、遺跡からの出土もこの時期に増え、墳墓や経塚や靈山などから鏡が出土しており、経塚から出土する鏡は納められた經典を邪惡なものや魔物からまもる目的で置かれたものであり、靈山は信仰の場であり、呪術的・信仰的な側面においても多量に鏡が使われた。

本県における鏡は、古墳への副葬品として発見される古墳時代を一つの画期として、その後出土例はなく、前項でみたような平安時代の八稜鏡にいたり、平安時代末から鎌倉時代にかけては、柏尾山経塚（東山梨郡勝沼町）・秋山経塚（中巨摩郡甲西町）・雲峰寺経塚（塩山市）や塩山市下萩原浅間塚、国立神社に奉納あるいは埋葬されたとされる北堀遺跡例（東八代郡一宮町）⁽⁸⁾といった経塚や信仰の場に出土している。県内出土の鏡も例外ではなく、呪術的・信仰的な用いられ方をしていたといえよう。では、水無遺跡の唐草双鳥八稜鏡はどうであろう。

まず、鏡の状態から見てみると、水無遺跡の八稜鏡は、文様が不鮮明で鋳上がりが悪いという点が特徴的である。八稜鏡が多量に出土した栃木県日光男体山々頂の例を挙げると、男体山々頂からは奈良時代から江戸時代にかけて山岳信仰の遺物が膨大な数発見されており、なかでも平安時代には鏡や仏具が多く奉納され、特に鏡は162面あり、しかもこのうち平安時代後期の瑞花双鳥八稜鏡や瑞花文八稜鏡が138面をもじめていて、これら八稜鏡は全体として薄手で、文様が鮮明さを欠き、鋳上がりが悪く、実用品としてではなく奉納のための儀鏡としてつくられたものとみられている。⁽⁹⁾この男体山々頂の例から推すと、水無遺跡のものも儀鏡の範疇でとらえられよう。

次に出土状況を見ると、水無遺跡と同様住居址からの出土例は二之宮遺跡や大原遺跡があり、これらはいずれも覆土（埋没土）からの発見となっている。住居址覆土（埋没土）出土の鏡は、八稜鏡ではないがこの他に韮崎市宮ノ前遺跡でも発見されている。

宮ノ前遺跡は市立韮崎北東小学校建設に伴い平成元年（1989）2月～平成2年（1990）4月に発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代にかけて423軒の住居址が発見されている。⁽¹⁰⁾鏡は第141号住居址覆土上面から出土しており、挽物の中に鏡面を上にして納められていた（第20図）。鏡は円鏡、銅製、鈕部には鈕座があり、直径8.3cm・厚さ約2mm～3.5mm、界圈は細い単圈



第20図 宮ノ前遺跡出土和鏡（1／2）（『宮ノ前遺跡』報告書より）

で、縁は外傾式で厚い。内区と外区の文様は不明である。第141号住居址は奈良時代に位置付けられているが、鏡は縁の形式からみると平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての和鏡ということになろう。なお、この鏡には漆紙片と布片が付着しており漆紙と布に包まれていたものとされ、さらに永久歯の中切歯か側切歯とされる歯がひとつ鏡の下に納められていた。

化粧道具としての銅鏡は手入れを怠ると鏡面が酸化しすぐにくもってしまうので、使用しないときには必ず布でくるみ鏡箱に納めたという。宮ノ前遺跡例は、鏡を布と紙に包み箱に入れたものであり、化粧道具として使われていたことも推測できるが、歯が入れられており、しかも住居址の年代が奈良時代に置かれているので、鏡は後世何らかの目的で埋納された可能性が高い。この場合は住居址と鏡の年代が掛け離れているので、住居廃絶後数百年たって呪術的なものに鏡が使用され土中に埋められたのであろう。大原遺跡や水無遺跡などの例では、住居址の年代と鏡の年代が重なるので、年を久しく経てから埋められたものとは考えにくい。

樹塚（莊塚）古墳例は追葬あるいは後世における塚への信仰的なものとされ、石動遺跡例も信仰的なものと解釈されているが、住居址出土の鏡の場合、その住居の住人が至宝として所有していたものが残されたのか、住居廃絶直後に埋納されたものか、住居廃絶後時を経て埋納されたものか、住居にかかわりなく後世に埋納されたものか、判断はかなり難しいと言える。水無遺跡の八稜鏡は、儀鏡として何らかの信仰やまじないの対象になったものであり、木箱に入れられていた可能性が高く大切に保管されていたとも考えられるが、住居廃絶後に木箱に入れ

て埋納された可能性も捨て難い。本遺跡の所在地は、遺跡西側の一段高い段丘上にある宇波刀神社（「社記」に式内社とある）のかつての神社地であったとの伝承が残っており、遺跡北側の地はホウリヤシキ（神社につかえる神職の屋敷の意か）と呼ばれ、あるいはこれとのかかわりも想定できるかもしれないが、これ以上は推測の上に推測を重ねるばかりとなるのでやめておく。

6 おわりに

水無遺跡の発掘調査終了後整理作業の時点で、現段階での県内出土八稜鏡の数が比較的少ないことを知り、それらの集成と水無遺跡出土の八稜鏡を紹介することを目的として稿を起こしたが、浅学のため思うように文章がすすまなかった。「信仰」や「呪術」という言葉で鏡の用法を述べてきたが、具体的に当時の人々の心性がどのようなものであったのか理解できず、現時点では、鏡を何故土中に埋納するのか知り得なかった。この点に関して大方の御教示・御教授を頂きたいと願うものである。もとより専門に研究しているわけではなく、鏡に対する知識を全く欠くため、手近な資料や文献を基に八稜鏡の観察を行い年代決定をし、解釈を行った。文中には誤認や記載の誤りが多々あると思われるが、先学諸氏のご叱正をいただければ幸いである。

なお、本稿を草するにあたり、多くの方から種々様々な御教示・御協力を頂いた。文末ではあるが、御芳名を記して深く感謝の意を表したい。

鈴木稔・畠大介・市川昌子・平野修（帝京大学山梨文化財研究所）、坂本美夫・新津健・森原明廣（山梨県埋蔵文化センター）、末木健・今福利恵（山梨県立考古博物館）、瀬田正明（一宮町教育委員会）、伊藤正彦（韮崎市遺跡調査会）、越石政幸（円野公民館長）

註

- (1) 前田洋子「和鏡の変遷」『考古学ジャーナル』185 1981、福井県立博物館『古鏡の美－出土鏡を中心－』1986。
- (2) 中野政樹編「和鏡」『日本の美術』42 1969。
- (3) 坂本美夫「甲斐国における古代末期の土器様相」『神奈川考古』第21号 神奈川考古同人会 1986、森原明廣「山梨県地域における古代末期の土器様相－『甲斐型土器』の消滅とその後－」『丘陵』第14号 甲斐丘陵考古学研究会 1994。
- (4) 『八代町誌』上巻 八代町役場 1975。
- (5) 菊島（坂本）美夫「山梨県・一宮町不動出土の八稜鏡」『甲斐考古』12の1 山梨県考古学会 1975。
- (6) 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第23集『二之宮遺跡』 山梨県教育委員会・日本道路公団 1987。
- (7) 『大原遺跡発掘調査概報』 一宮町教育委員会 1990。本遺跡の正式な報告書はまだ刊行されておらず、八稜鏡の実測図等の資料は一宮町教育委員会の瀬田正明氏より呈示して頂いた。
- (8) 萩原三雄・末木健『山梨の考古学』 山梨日日新聞社 1983、出月洋文「北堀遺跡出土の和鏡残欠について」『山梨県考古学協会誌』第6号 1993。
- (9) 福井県立博物館『古鏡の美－出土鏡を中心－』前掲註(1)。
- (10) 韮崎市教育委員会ほか『宮ノ前遺跡』 1992。

引用・参考文献

中野政樹編「和鏡」『日本の美術』42 1969。広瀬都異『和鏡の研究』角川書店 1974。『韮崎市誌』下巻 1979。「特集・鏡」『考古学ジャーナル』185 1981。江坂輝彌ほか編『日本の考古学小辞典』ニュー・サイエンス社 1983。福井県立博物館『古鏡の美－出土鏡を中心－』1986。川越市立博物館『美の先達たち－鏡にみる日本の美と心－』1991。斎藤忠『日本考古学用語辞典』学生社 1992。